高校英語における「聞く力」の評価について

高　橋　み　な　子

I　はじめに

日本の英語教育において，こと数年来「役に立つ英語」を求める声は非常に強い。「役に立つ英語」としては，もっとも常識的には「聞いて理解できる」「自分の思うことを発表できる」「手紙などが書ける」「新聞・雑誌などが読める」ことが必要であると考えられている。「役に立つ英語」という声の中には，従来の英語教育が，ややもすると入学試験を目標としているために，「読む」ことに重点をおき，「聞き・話す」能力を身につけるにはいたらないことに対する非難が含まれている。街に氾濫している英会話の本はその反動でもあろう。

文部省主催の38年度高等学校教育課程研究発表大会英語部会においても，全国共通問題の「英語Aにおいて英語を聞き話す能力を伸ばすにはどのようにしたらよいか」というテーマで，熱心に発表・討議が行なわれ，また都道府県問題でも「聞き話す」能力に関するものが半数近くを占め，主題は異っても，何らかの形でこの点に触れなかった発表はなかったと言ってよい。

言語学習の正道は speech であり，「聞くこと，話すこと」を基礎としない「読み」が邪道であることを考えるならば，以上のような動きはまさに当然のことで，何ら異議をはさむ余地はない。外国語を学ぶ究極の目的がその国民の思想・制度・習慣・文化——換言すればその国民精神を理解することであるとするならば，言語は，Charles C. Fries の言うように「その外国語を母国語とする国民の話す speech の流れを了解し，そして彼らにこちらの話しを了解させる」という，communication の道具であることを何よりもしっかりと認識する必要があろう。

言語習得過程の第一段階である「聞き話す」の活動中でも，「話すこと」の基礎としてまず「聞くこと」があることは言うまでもない。そうとすれば，語学の4技能 hearing, speaking, reading, writing のうちで，まず hearing に焦点を合せる理由はあろう。

前述の教育課程研究発表大会における本県研究問題は，「聞くこと，話すことの能力の適切な評価の方法はどのようにしたらよいか」であったが，私はこれに参加する機会を得て，hearing の評価について考えてみることにした。

II「聞く力」の評価

「聞き話す」領域の評価は，必要性は充分に認められているにもかかわらず，困難であるという理由でほとんど手がつけられていなかった。「受験英語」の強い勢力のために，hearing, speaking はかえりみられず，従ってその評価方法が確立していない。
評価方法が確立していなければ，教師の指導，生徒の学習においてついおろそかにされるという悪循環があった。

評価の方法としては，教師と生徒の会話形式によるテストがもっとも望ましいものであるが，1クラスの生徒数が50名以上という現状では到底実行できない。できるだけ日常の授業の中で観察するとは言ってもこの生徒数ではなかなか難かしく，補助的な役割しかできないと思われる。中学1年あたりならば指名に迷う程活発に発表するが，中学の上級生，まして高校生ともなれば，クラスの前で積極的に発表する者は極めて少ない。そういう傾向に陥る生徒に，英語への興味を深めさせ，気楽に英語を聞き，話すことのできる雰囲気を育てていくようにすることは当然の努力としてもそれを期待しているばかりでなく，ペイパーテストの条件の中で，できるだけ正確に「聞く力」をみるための研究がなされなければならない。しかし答は筆答でも「聞く」テストである以上，与える材料は必らず音声を伴うもの，それもできるだけ native speaker のものであることが必要である。よくみられる「アクセントをつけよ」とか「同じ発音のものを選べ」という問題は，机上の知識を測ることはできても，実際その発音が正しくできるかどうかはわからないのであり決して真の「聞き話す」能力のテストとはなっていない。Native English を与えることは，テープレコーダー，ラジオ，レコードなどの普及した現在ではさして困難ではない。

さて，「聞く力」と一口に言っているが，その内容は何であろうか。「聞く力」は大きく分けて，(1)音声を識別する力，(2)意味を理解する力とに分類できる。我々の「聞く」という活動は，まず音声を聞きとり，次にそれを意味と結びつけてその内容を理解することである。後者は前者なくしては成り立たないが，しかし前者の段階に留まっているのでは「言葉」を聞いたことにならない。音声が単に音声としてしか受け取ら

れないならば，それは communication の道具ではない。このような意味で，入門期においては，音の識別，更に進んで単語や stress, intonation の識別に関するテストでよいとしても，相当進んだ段階の生徒には，意味を持った文・節・物語などを聞かせて，その内容が理解できたかどうかをみるテストを多面的にとり入れなければ充分でない。 Listening comprehension が重要なのである。極端に言えば聞かされた事柄の中に 2・3 の識別できない音があっても，全体の要点がわかればよいであろう。

いわゆる直読直解は，読んだ英文を，日本語を介在させずにすぐに理解することで，受験用英語に慣れた生徒にとってもっとも困難な学習活動の一つだとされているが，「読む」場合また「話す」場合とも違い，「聞く」場合こそは，話し手のペースに従っていかなければならないという制約があるために，音声の perception と comprehension の間に時間的余裕がない。まさに thinking in English そのものである。

Ⅲ 評価の具体的な方法

実際に教室で一斉に auditory comprehension をテストするに当って，方法はいろいろ考えられるが主なものに次がある。

A. Objective Test

1. 英文を聞かせ，あとでその内容に関して質問をし，正しい答えを選択させる。
2. 英文を聞かせ，その正しい意味を選択させる。
3. 英文を聞かせ，その内容に合った文を選択させる。
4. 英文を聞かせ，その意味を表わす絵を選択させる。

B. Subjective Test

1. 英文を聞かせ，その大意を日本語で書かせる。
2. 英文を聞かせ，適当な題をつけさせる。

Aの1，2，3においては，それぞれ(イ)質問や解答群を英語で与える場合，(ロ)質問や解答群を日本語で与える場合とがあるが，(イ)より(ロ)が望ましいと思われる。(イ)では，答えがない場合，最初聞いた本文が理解できなかったのか，質問あるいは解答群の英語がわからないのかを採点者に判定できないからである。(ロ)では，本文を聞く前にあらかじめ解答用紙が配布される場合には，聞きとる上で大きなヒントを示すことになり好ましくないこともある。38年度の能力検定試験の「聞く力」のテストではこの点よい工夫がされて，解答群も音声を通じて与えていたが，答えが簡潔なものならば聞いていても混乱を生じないであろう。4. の場合は初歩的なものならば端的でよいが，問題の作製，描画は容易ではない。

客観テストの欠点は，答えに偶然性が入りこむことであり，問題作製には多大の工夫が必要である。

主観テストは何と言っても採点の苦労が大きい。しかし生徒の能力を充分発揮させ，その実態を把握することができるという利点がある。

いずれのテストでも一長一短があり，どれか一種で完全と言えるものはない。我々としてはその時の必要に応じて各種テストをうまく組み合せていけばよい。

なお以上いずれの場合にも留意すべき点は，著るしく記憶力を要するような長文や内容が複雑すぎる文は当然避けることである。

Ⅳ テスト

次のテストは私が試みに38年7月から同年12月の間に実施したものである。私は敢えて主観テストの方をとりあげ，その結果得られた資料をもとに反省し，今後の「聞くこと」の指導の参考にしていきたいと思っている。

材料：NHKラジオ高等学校放送 "Listen to me." の録音テープ。この番組のねらいは，『高等学校の英語で扱いにくい「聞くこと，話すこと」に中心をおき，特に「聞くこと」を外人の易しい英語を何回もくりかえして聞くことによって練習する』ことであり，内容は物語，民謡，年中行事，ゲームなど興味深い。朗読者は明治学院大学講師 Mrs. Van Wyk. 私は1年半分の録音テープの中から，一部の生徒だけが興味を持ったり，くわしく知っていたりするものでなく，誰にも同じような関心をひく題材であること，あまり長くないこと，内容にまとまりがあることなどの点を考慮して，テストの材料に4篇を選んだ。

なおこのテープはすべて本校加藤剛教官が毎週録音されているもので，快よく利用させて頂けたことをここで感謝申し上げたい。

方法：材料の録音テープを聞かせ，その内容を理解したかどうかをテストする。また「聞く力」との比較のために，原文をプリントしたものを与え「読む力」も調べた。いずれの場合にも，ヒントを与えない意味で，必ず表題を削除し，本文のみを用いた。

理解度をみる方法としては題材に応じて，イ．適当な題をつけさせる。 ロ．大意を書かせる。 ハ．内容を箇条書きさせる。 ニ．大意と感想を書かせる。の4方法を用い，各篇について1ないし2の方法を取りあげた。なお，答えはすべて日本語で書かせた。材料は native speaker または日本人によって話され，速度としては normal と slow の2段階がある。選

んだ4篇の平均語数は152語，平均時間は normal speed で68秒，slow speed で89秒であった。

対象生徒全員に毎回同一の出題をせずに，同じ材料をある組には hearing で，他の組には reading で与え，理解度を検討する角度をいろいろ変化させた。

対象：高等学校において常時私が授業を担当しているクラスに限った。

高等学校1年全員（AB2クラス），3年半数（1クラス，高3のみ能力別編成でその上位クラスα）

参考資料：1年生全員（105名）についてアンケートをとった。

A．英会話を勉強したことがあるか。

1．な　い　57名

2．あ　る　48名

イ．月2，3回以下32名

ロ．週1回以上　16名

B．英会話の勉強に何を利用したか。（1人で何通りも答えてよい。）

1．テレビ	30名
2．ラジオ	16名
3．レコード・テープ	12名
4．塾	9名
5．映　画	3名
6．個人指導	3名
7．英語クラブ	1名

C．英会話を勉強したいか。

1．したい	58名
2．したくない	9名
3．どちらでもよい	35名
4．無　答	3名

第1回テスト（38年7月下旬）

材料：Mealtime in America

Mealtime in America is looked upon as a time for friendly talks.

People carry on conversation while they eat their meals.

They very often stay at the table after meals and go on talking.

But you must not talk with food in your mouth.

We do not always talk much at breakfast, for we are usually in a hurry. But dinner is never a hurried meal.

Another thing is different about American eating. No one picks up his plate while eating. The only dishes that are picked up are cups and glasses.

It is not bad at all to use your fingers when you eat fried chicken.

Noisy eating is something very impolite. Never make noise while having tea or soup or anything.

Maybe all this sounds difficulut, but don't worry too much, because nobody will be watching to see if you are making mistakes.

Just relax yourself and enjoy talking with everybody else.

方法：

（i）Hearing —— native speaker による normal speed で聞かせ，日本語で題を書かせる。

（ii）Hearing —— 日本人による slow speed で聞かせ，題名，内容を箇条書きさせる。

（iii）Hearing —— native speaker による normal speed で聞かせ，題名を書かせる。

（iv）Reading —— 原文のプリントを与え，15分以内のうちに内容を箇条書きさせる。

（i）から（iv）を同一授業時間内にひき続いて実施する。

採点：題名については次の5段階とする。

A．正解　例：「アメリカの食事時」「アメリカ人の食事のしかた」「アメリカにおける食事の作法」

B．準正解　例：「食事」「食事のマナー」「日常3度の食事」

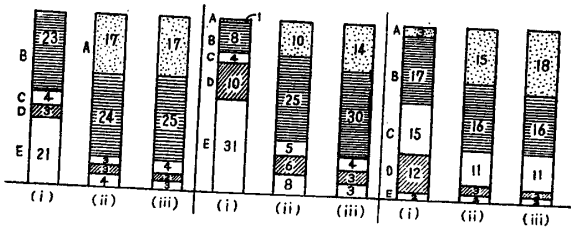
C．拡大または部分解釈　例：「アメリカの作法」「朝食」「夕食時の談話」

D．誤答　例：「台所の手伝」「アメリカにおける規則」

E．無答

結果と考察：定期試験（hearing，speaking の領域は含まれない）の成績と今回のテストの成績との相関を知りたいと考え，3年生と同様に1年生も便宜上定期試験の成績上位者（α）と下位者（β）に2分して統計処理した。テスト（i）から（iii）への理解度の伸びは図1に示される。図中の数字は人数を表わす。

〔図1〕



1年α　　1年β　　3年α

Hearing と reading との相関を知るために，テスト (ii) の内容個条書と (iv) のそれとを，100点満点に換算した結果が表1である。

〔表1〕

テスト / クラス	(ii) hearing	(iv) reading	定期試験
1 年 α	4.7	54.5	77
1 年 β	0.9	21.4	44
3 年 α	8.2	78.0	

前述の参考資料に挙げられたアンケートで英会話を週1回以上勉強したと答えた者16名のみを抽出して比較してみたのが表2である。

〔表2〕

テスト / クラス	(ii) hearing	(iv) reading	定期試験
α (11名)	11.2	67.5	81
β (5名)	2.6	30.0	48

予想されたことであるが，native speaker の normal speed では内容理解は極めて困難で，特に1年では丁度半数が何を言っているのかさっぱりわからない。英語で言う "It's Greek to me." である。もう一度，今度は日本人の slow speed で聞けば理解度は著るしく増大する。ちなみに normal と slow の speed の相違を計ったところ，本文を話すのに normal では74秒，slow で108秒であった。

Hearing と reading の成績の違いも予想はされていたが，非常な差がある。書かれたものを読むのならかなり理解できるが，耳からであるとわからなくなってしまう。

1年生と比べ，3年生の方が，また1年でもβよりαの方が hearing においても成績はよいが，理解度の変化の傾向が非常に似ている。即ち，(i)から (ii) へはかなり急激に伸びるが，(ii) から (iii) へはほとんど変化がない。このことは，日本人の話す英語に比べ，native speaker による normal speed の英語がいかに耳慣れないかを示すものであろう。逆に言えば，hearing の練習をするのに，ぜひとも native English を聞くべきだということになろう。Oral introduction, oral method をと促がされるが，native speaker でない我々教師は指導計画や自己研修を充分考えていかねばならない。

主観テストであるため採点上迷ったことはあった。特に題名だけを書かせたために，感がよくてたまたま題名は当ったが，肝心な内容は把握できなかった者がもしいたらどの位だろうか，また内容がわかっても題のつけ方が下手で正解とみなされなかったものはどうかという疑問に悩まされたことは確かである。

第2回テスト (38年9月上旬)

材料： American Picnic

In Japan people usually go on a picnic in spring. As soon as the new school year begins, the whole class and their new teacher go together and become friends with each other.

But in the United States the summer is the picnic season in many places. And all the neighbors or the members of the same church spend a holiday together by the lakesides or in a beautiful forest.

Each family brings potluck food for lunch. So you will find all kinds of food at the picnic. All the families enjoy having a little of everything.

They eat their lunches by the picnic tables planted here and there in the forest or by the lake side.

Some enjoy swimming or boating on the lake or playing volleyball on the grass, and others enjoy just watching them.

Picnicking is fun for all the parents and the children.

方法： (i) Hearing —— native speaker による normal speed で聞かせ，大意を簡単に書かせる。(対象は1年B組)

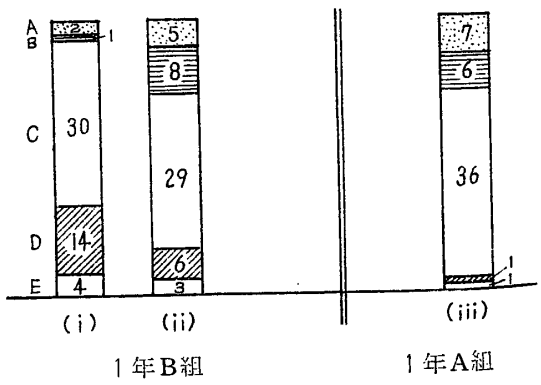
(ii) Hearing —— (i) と同じものを直ちに再度行なう。(対象は同上)

(iii) Reading —— 原文のプリントを与え，5分以内で大意を書かせる。(対象は1年A組)

採点： A. 正 解　B. 準正解　C. 一部正解　D. 誤 答　E. 無 答

結果と考察：

〔図2〕



今回のテストでは slow speed のものは録音状態が悪いため使用しなかった。時間の都合で3年生を対象に加えることができず，簡略なテストであるためはっきりとは言えないが，native speaker の normal speed のものでも繰返せば理解者が少しではあるが増していることは，今後の指導に明るい希望を抱かせる。第1回のテストと違い，"picnic" という語が幾度か耳に入ったためか無答者はずっと少ない。

それにひきかえ，reading の成績の悪いことには驚く。（1年のABの両組は定期試験で判断する限り均等であると考えてよい。）これは生徒の「読むこと」の欠点をさらけ出している。テストを始める前に，時間が限られているから，一語一語和訳するのではなく全体をよく読んで大意をまとめてから書き出すようによく注意を与えておいたのであるが，それができないのである。初めから全部和訳しようとするため，中途で時間切れとなってしまった者が70％なのである。読んだものの要点をすぐまとめられるような訓練の必要性を痛感する。

第3回テスト（38年10月初旬）

材料：Summer Jobs

What are you going to do during the summer vacation ?

As for me I am going to be a swimming teacher.

I will teach swimming to a group of little children spending their summer at the seaside.

I can earn money while I am enjoying swimming.

This is one of the best summer jobs we can get, I am sure.

A friend of mine, Makoto, is going to be a tuitor this summer. A tuitor is a teacher who teaches at home.

Makoto will teach English and mathematics to Mr. Ota's daughter. He will help her with the summer work given by her teachers. Most students of Japan are given a lot of work to do at home during vacations.

My older sister has also got a very good summer job. She will be a baby-sitter in an American home.

Her job is to sit and play with a baby and take care of it while its parents are away. She is a college student. She speaks English well enough to hold this job.

I hope I can speak English as well as she does after a couple of years.

方法：（i）Hearing —— native speaker による normal speed で聞かせる。その前にヒントとして全体が3つの部分に分かれていることを指示しておき，それらを列記させる。（対象は1年A組と3年α）

(ii) Hearng ——（i）と同じものを直ちに再度行なう。（対象は同上）

(iii) Reading —— 原文のプリントを与え，5分以内で3つの部分を列記させる。（対象は1年B組と3年α）

(iv) Reading——(iii) にひき続いて，さらに10分間与える。（対象は同上）

採点：A. 3人の case についてわかったもの

B. 2人の case についてわかったもの

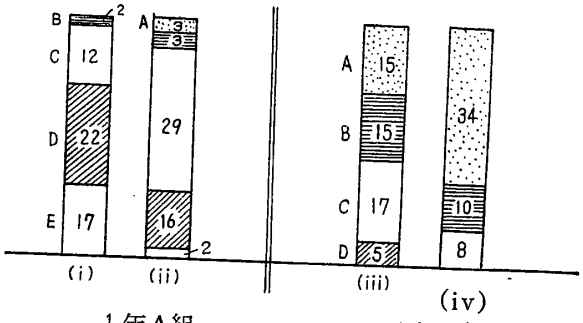
C. 1人の case についてわかったもの

D. 誤答　例：「私は水泳を教えてもらう。」

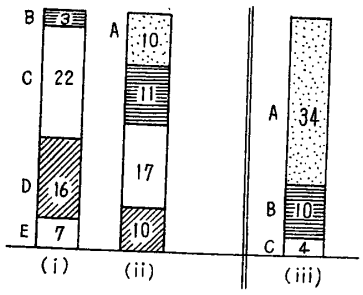
E. 無　答

結果と考察：1年A組の hearing とB組の reading の比較は図3で，また3年の hearing と reading の比較は図4でそれぞれ示されている。

〔図3〕



〔図4〕



夏休みのアルバイトについての親しみやすい内容だと考えながらテストに当ったが，あまりよくない。しかし繰返して聞けば native speaker の normal speed のものでも理解者が増すことは，前回のテストよりはっきり示されていて心強い。反復練習の効果

が非常に大きいことに納得がいく。一方直読直解のできない欠点はやはりよく見られる。試みに更に10分延長して読む時間を与え書かせてみれば，ほとんどの者が理解できるのであるから。さすが3年生の方が読むのはかなり速い。問題は，それをいかに簡潔に日本語でまとめるかにかかってくる。「聞く力」の評価を主観テスト形式で行なえば，「聞く」以外の要素の評価を含んでしまうという批判があるのはこのためであるが，実際の生活の中では純粋に「聞く」だけで終るのではなく，「聞いて」それに応じた動き reaction があるのだから，「聞く力」以外の能力の評価をある程度含んでもやむを得ないことだと私は考えている。

第4回テスト（38年12月中旬）

材料　A Joke : Where am I going ?

London is well-known for thick fog.

The fog is often so thick that you can almost cut it with a knife into slices like bread.

You can hardly see your hand before you.

One morning an old man was walking along the street in the thick fog. "Watch your step, watch your step," he kept saying to himself.

At last he did not know where he was. He was entirely lost in the fog, and he was even scared.

Just then he heard footsteps coming toward him through the darkness.

"Where am I going?" the old man shouted anxiously.

Then a voice came to him from the darkness :

"Into the river, sir-I have just come out."

方法：（i）Hearing —— native speaker による normal speed で聞かせ，大意を書かせる。（対象は1年A組と3年α）

(ii) Hearing —— （i）にひき続き直ちに native speaker による slow speed で聞かせ大意を書かせるとともに，感想を形容詞1語で表わさせる。（対象は同上）

(iii) Reading —— 原文のプリントを与え，5分以内で大意を書かせ，感想を形容詞1語で表わさせる。（対象は1年B組）

採点：(ii) (iii) の採点規準であるが，（i）にも適応させる。

A．内容がわかり，mood も解したもの

B．内容がわかったもの

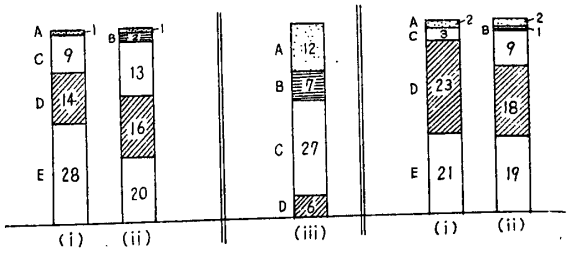
C．内容の一部がわかったもの

D．誤　答

E．無　答

結果と考察：理解度の比較は1年AB，3年とも図5で示されている。話から受けた感想を表わす形容詞の統計が表3である。実は話が始まる前から伴奏の音楽が入り，しばらく続く調子が笑話とは縁遠い印象を与えるので，断片的にしかストーリーを解せなかった者は多少混乱したらしい。

〔図5〕



1年A組　1年B組　3年α

〔表3〕

領域 / クラス / 形容詞	Hearing			Reading	合計
	1年A組	3年α	小計	1年B組	
こっけい，おもしろい，愉快	4	1	5	25	30
悲しい	13	6	19	0	19
かわいそう	3	2	5	10	15
おそろしい，こわい	3	9	12	2	14
さびしい	2	5	7	1	8
暗い	1	6	7	0	7
驚くべき，すごい(霧の濃さ)	1	0	1	5	6
気味が悪い	0	3	3	3	6
静か	0	2	2	1	3
珍らしい	0	0	0	1	1
興奮する	0	1	1	0	1
わびしい	1	0	1	0	1
悲惨だ	1	0	1	0	1
残酷だ	0	0	0	1	1
つまらない	0	1	1	0	1
馬鹿馬鹿しい	0	0	0	1	1
無　答	23	13	36	2	38
合　計	52	49	91	52	153

これまでの3篇の日常生活的なものと違って，joke であることがほとんどわからなかった。話の筋も充分わからない者は到底この joke のよさを感じることはできない。英文学ひいては英国民性の持つ humor をずばり示す絶好の jokeは，ユーモアに乏しい日本人には実感できないかも知れない。Robert Lado がその著 'Language Testing' の中で

"Do we score higher a translation that has captured the mood of the original and renders it in the foreign language even though the details of the utterances are not well translated? Or do we score higher a translation that is accurate in every detail but misses the mood and significance of the original?"

と解決の難しさを述べているが，現に，定期試験などではトップクラスの成績を示す何人かの生徒が，話がわかって笑いの渦が起った後もまだ浮かぬ顔をして考えこんでいた。

言語を一つの技能として身につけるための指導・学習はいくら充分にやってもやりすぎることはないが，それと共にその言語の持つ歴史と，その言語と共に生きて来た国民の生活を決して忘れてはならないと思う。

このテストでもう一つ気づくことは，hearing において，3年生より1年生の方が好成績であることだ。理由はいろいろ考えられる。まず3年より1年の方が深刻に考えないために joke が素直に受け入れられたのではないかという点である。材料となった話の後半は，'scared' 'darkness' 'anxiously' という語で終る文が並んで，これらの単語が強く印象に残ってしまったのが3年生のようだ。表3にこのことがよく表われている。

次に思い当ることは，1年生の方が hearing を確実に訓練しているのではないかという点である。1年生は後期10月から正規の時間割の中に週1時間 hearing の時間が設けられた。しかも材料は同じNHKの番組 Listen to me の録音テープから選ばれている。(指導は加藤剛教官) 始めてから2ケ月半余を経てその効果が少しでも現われて来たとするならばこれ程喜ばしいことはない。ぜひこのような授業を続けていきたいものである。

Vおわりに

長い間かえりみられることの少なかった「聞く力」の評価は，一歩踏み入れただけでもさまざまの困難にぶつかる。採点に客観性を持たせながら，生徒が把握したものをそのまま認め得るような「聞く力」の問題と解答形式はどこに見出されるだろうか。

私が用いた材料は，授業の教材と直接には関係がないものであったが，実際に各学期毎の評価とどのように関連づけるかは問題となろう。

また他の領域の評価と比べて，「聞き話す」能力の評価では，生徒の心理をより一層考慮すべきだと思う。私が試みたテストは今後取り入れられてよい形式の一つだと考えているが，ただ2度3度と同じ材料を与えて筆答させる方法は苦痛ですらあったろうと思う。勿論実験的な意味があってしたことであるから，平常の評価のために利用するのならば，一度でよい。それを材料を変化させて毎週，あるいは毎時間でもできたら非常に効果的であろう。

評価のために用いる視聴覚器具の持つ制約も問題点の一つである。広い教室でテープレコーダーを動かす時，一応最後部の座席まで行って確かめたが，音声は充分聞えるにしても，聞きもらすまいという緊張は前部の席の者よりはるかに強い。

「聞く，話す，読む，書く」の4技能をより円満に伸ばしていくための研究はもっともっとされなければならないと思う。